優秀賞　大学生部門

妄想力

京都大学 3年
松森　翔馬

人には生きる源、いや生き抜く源が必要だ。生きる源は食事で十分。生き抜く源とは精神的なもの、「妄想力」を指していると思う。

想像力というお堅い言葉も存在する。想像力と違う「妄想力」とは一体何なのか。病的な意味ではない。ここでいう「妄想力」とはどうでもいい事を空想するという意味で用いることとしよう。

例えば、異性からモテたことのない僕は、いつも天から自分好みの女性が降ってくることを妄想していた。黒髪で清楚な彼女を受け止めた僕は、一目惚れに陥ってしまうが、彼女は記憶喪失。彼女が大切に握りしめるペンダントには、幼少の彼女と一人の少年が並ぶ写真が入っていた。少年の姿に見覚えがあった。それは昨年実家を整理している際に見つけた写真に写る幼少の自分であった。すぐに転校してしまった女の子との一夏の想い出。そうか！あの時の女の子は君だったのか…。僕は彼女に問うが、彼女は何も答えず…。

例で挙げた空想は正しく妄想である。そんなこと起こるわけないという理性的な判断をしてしまえば、このような妄想は決して生まれない。もっと現実味があって、役に立つようなことを想像しなければと思考するかもしれない。想像は現実と相関し、妄想は虚構と相関する。

しかし、先の部分こそが妄想の醍醐味なのだ。現実を直接的にしろ間接的にしろ捉えることは大切だ。妄想は単なる現実逃避かもしれない。でも、現実に向き合っていては見えない世界もある。あなたは外を歩きながら、先のようなドラマを思い浮かべたことはありますか。おそらく、空の色、模様の感じ方が変わりますよ。

現実は嫌なこと、退屈なことにあふれている。そして、その現実を生き抜く源こそが妄想なのだ。目の前に大きな壁が立ちふさがっても、その壁の模様が人の笑顔に見えたなら、あなたも笑顔になりませんか。